

## 第2回 信州学び円卓会議

日 時：令和6年2月1日（木）  
13時00分～16時06分  
場 所：信濃教育会館  
（オンライン併用）

### 1 開 会

○丸山課長

定刻となりましたので、ただいまから第2回信州学び円卓会議を開会いたします。

本日は、御多忙のところ御出席を賜り、誠にありがとうございます。会議の進行を務めます長野県県民文化部県民の学び支援課長の丸山でございます。どうぞよろしくお願いたします。

初めに欠席状況の報告をいたします。長野県松本県ケ丘高校の徳永校長、須坂市の三木市長は欠席でございます。なお、NPO 法人 Hug の篠田代表はオンラインでの御参加となります。また本日オブザーバーとして、阿部知事、内堀教育長にも御出席をいただいております。

会議事項に入る前に、事務局からあらかじめ御承知おきいただきたい点について、3点御説明いたします。まず、この会議については公開で行いますとともに、会議資料、議事録及び撮影した写真等について、県のホームページなどに掲載いたしますので御承知おきください。

2点目でございますが、本日の会議の様子はライブ配信しております。また、議事録を作成するため録音をさせていただいております。

3点目ですが、1回目の信州学び円卓会議でも活用させていただきましたが、議論の内容を視覚化するため、グラフィックレコーディングを行いまして、会議の終わりに振り返りを行う際に使用したいと考えております。また完成したものについても、県のホームページ等で掲載をいたしますので、あらかじめ御承知くださいますようお願いいたします。

次に、お配りいたしました資料でございます。お手元の配付資料一覧のとおりでございます。後ほど御説明をさせていただきます。

なお本日は、私から見てのカメラの右側でございますけれども、モニターにて信州学び円卓会議県民意見交換会のダイジェストムービーを放映しております。会議中も放映させていただくとともに、後日ホームページにも掲載をさせていただきます。

それでは、会議事項に入らせていただきます。ここからの進行は荒井座長、お願いいたします。

### 2 信州学び円卓会議県民意見交換会の振り返り

○荒井座長

皆さん、こんにちは。座長を拝命しております信州大学の荒井でございます。議事進行

を務めさせていただきます。

次第を御覧ください。本日は前半で、この間開催してまいりました県民意見交換会の振り返りを行います。後半は、その内容を踏まえて、議論を深めてまいります。

まず、事務局から資料の説明をお願いします。

#### ○事務局

事務局から資料の説明をいたします。

資料1を御覧ください。9月以降開催いたしました全6回の県民意見交換会の概要をまとめた資料となっております。また8ページは、県民意見交換会開催後にいただいた意見等を記載しております。

資料2から資料4につきましては、後半の議論の際に使用する資料ですので、前半の説明は以上となります。

#### ○荒井座長

ありがとうございます。ただいまの説明の通り、9月1日の第1回円卓会議の後、6回にわたって県民の皆さんと様々なテーマで意見交換会をしてきました。これから御参加いただいた委員の皆様方から報告と振り返りをお願いできればと思っております。

最初に、大久保委員からお願いいたします。

#### ○大久保委員

皆さんこんにちは。根羽村村長の大久保でございます。

私からは、9月23日に根羽村で行われました意見交換会について報告させていただきます。テーマについては資料にありますとおり、「次世代に続く中山間地域での学びづくりとは」という形で、29名の参加者の下でいろいろな意見を交換させていただきました。

その中で、資料で6項目にまとめてございますけれども、地域資源を活用した学びを生み出すとか、小規模校ならではの強みを生かしていくんだといった話が出てまいりましたけれども、それらを取りまとめてお話をさせていただきたいと思えます。

まず一つ目としては、学校を地域に開いて、大人も子供も一緒に学ぶ環境をつくる、世代間を超えた地域で学ぶ、そういった仕組みづくりは大切だという共通認識があります。

二つ目としましては、小規模校の特性を生かした学校づくりが非常に大切になってくるだろうということで、まずは学年を超えた自由度の高い学びや、学びのゴールを定めない学校、子供の認知度に応じた柔軟な学び方なども必要だというお話が出ました。

さらに、子供や、特に教員のやりたいことができる自由なカリキュラムとか学校づくりというのがこれからのテーマになるのではないかというのも、大きな話題になりました。

三つ目でありまして、ここは結構重要な部分ということで議論させていただきましたが、教員と子供との密接なコミュニケーションが取れる環境づくりが必要ということでもあります。そのためには、やはり教員の皆さんのゆとりや、研修、支援体制などの充実が大切であるということ。

それから、特に中山間地域でしっかりと活動ができる環境づくりが必要だということでありまして、これについては、特に世代間のバランスの取れた教員の配置や、熱意を持つ

た教員の配置、あるいは中山間地域の経験が評価される教員の人事評価制度、あるいは中山間地域の現場で働くことが価値ある仕事と認められる僻地手当等の大幅な見直し等々、そういった部分が必要ではないかという意見が多く出ております。

さらにもう一つは、中山間地域の選択肢の考え方です。中山間地域で既存の選択肢からいろいろ選ぶのは非常に難しいことではありますけれども、それに対しては、子供に限らず大人たちも含めて、主体的にやりたいことを創造していける取組がこれから必要になってくるのではないかという形でいろいろな議論がなされました。

特に子供たち、根羽学園を卒業した高校生から始まり一般の方までそれぞれの意見が出ましたけれども、やはり、その地域の中でしっかり学ぶ仕組みをみんなでつくっていく必要があるということが大きな意見だと思います。

最後に、中山間地域の小規模校ならではの学びの実現に対して、地域の中でしっかり議論をして、実践していくことが必要になってくるので、ぜひこういった会議を通じて次のステップに進んでいければいいというのが大きな話題になっております。

以上簡単でありますけれども、状況報告させていただきました。よろしくお願いします。

#### ○荒井座長

ありがとうございます。次に、同じく第1回に参加いただいた三輪委員、お願いします。

#### ○三輪委員

よろしくお願いします。今、大久保委員から概要についてはお話いただいておりますので、それを踏まえての感想等を述べさせていただきたいと思います。

私も初めて根羽に伺いましたが、「こういうところでの体験もいいな」ということを強く思いました。学校も非常に小回りが利く、これからいろいろなことを変えていけそうな自由度を感じる、そんな雰囲気、「なんかいいな」と、とても可能性を感じました。

先ほどもお話がありましたけれども、中学校の学習はここまでだというボーダーを決めることなく、小学校・中学校が連携して、伸びたい子、学びたい子はそこから先にどんどん学習を発展させていくことが可能な規模だということ、できそうだということも思いました。自由進度学習や、探究的なこと、環境の中でできることがあるかなと思いました。

その一方で、参加した生徒さんからも少し出ましたが、やはり人が少ないので、固定的な人間関係の中で得られない学びについては、私たち周りの大人が工夫をして、例えば、週に一度、月に一度でも近隣の学校に行き行って共に学ぶとか、オンライン等を使いながら、自分の持っている考えを広げていく、深まりが持てるようなこともいいのではないかと考えたところです。

地域の多様な方が学校や子供たちに関わっているところも魅力かと思いました。子供たちの、特に義務教育での学びは、人や物と出会うこと、その出会った中でどんな経験をするのかということが、その子の将来の選択肢、ウェルビーイングにつながる基になるのではないかと考えています。根羽村に集まってきている大人たちも、自分の生き方として、自ら選んで来ているので、大人と出会って絡んでいくことが、子供たちの将来の選択肢にもつながっていくことを考えると、長野県はいろいろなところに小規模な地域がありますが、大人も子供も自然豊かな地域での体験が、教育という視点で強みになっていく、そん

なモデルが出てくるといいと思いながら、皆さんの御意見を聞かせていただきました。

○荒井座長

ありがとうございました。第1回目は、中山間地の学びと関わって、学校の外側に学びを拓いていく視点や、地域の資源を最大限生かして新しいことにチャレンジしていくことの重要性が指摘されました。究極の個別最適化や協働的な学びを実現できる環境として位置付けられるかがポイントとなると思います。

続きまして、第2回の振り返りとなります。机上に資料を追加で配付させていただいております。第2回目の意見交換会は、信州居場所・フリースクール運営者交流会の皆様が、主体的に全体の企画運営を担っていただき、行政と協働的な形で実現することができました。また当日の内容を踏まえた提言書も提出いただいております。

なお、その提言書の内容を項目化したものを、資料1の最終ページにも記載させていただいております。御確認ください。

それでは、御参加いただきました竹内委員から振り返りをお願いいたします。

○竹内委員

竹内でございます。よろしく願いいたします。

第2回県民意見交換会「子どもの居場所と学びの継続について」ということで、私自身の感想も含めて御報告させていただきます。

まずこの会は、保護者、学校関係者、支援者、民間団体など、子供を取り巻く様々な立場の当事者が、企画段階より合意形成を図り、当日もそれぞれの多様な視点を生かしながら、進行にも主体的に関わっていただいたという点で、ほかの意見交換会と若干趣の異なる会になったのではと感じています。関係者も含めると50名を超える参加とメディアの取材等も入りまして、終始自由な雰囲気の中で、大変活発で有意義な意見交換ができたと思います。

当日の概要は、事務局にまとめていただいた資料1と参考資料2のとおりですが、論点としては、当事者目線からの子供本位の価値観の醸成、官民連携による子供を真ん中にした学びと育ちの環境づくり、特にフリースクールや居場所等、地域や民間団体による活動の質と価値をどう高め、また社会的認知を広めていくか。その点で、4月から施行される信州型フリースクール認証制度への関心を高め、官民連携でこの制度を育てていくことの大切さといったようなことを中心に、意見交換がされたと理解しています。

子供を取り巻く諸課題を解決するためには、学校、家庭、地域、民間団体、行政がそれぞれの役割を再確認しつつ、互いに持てる力を重ね合わせながら、社会全体として可能な限り、網目の細かいセーフティーネットが見える形でつくり上げなければならないと考えますが、様々な立場の方々が垣根を越えて膝を突き合わせながら、自分事として問題意識を共有し、相互理解を深めていくプロセスをこの会の参加者が体感できたことは、当事者の意欲と自信の高まりも含め、大変有益だったのではと感じています。

先ほど座長からもお話がありましたが、この第2回の実施に中心的に関わっていただいた信州居場所・フリースクール運営者交流会というネットワークによる、子供たちの多様な学びの在り方を考えていくための提言書が当日の資料として配付されておりますが、私

は、まさに目指すべき一つの県民運動の要素が凝縮されているのではと感じ、当事者の生の声に基づいた貴重な提言であると受け止め、今後の円卓会議での議論の軸の一つにしたいと考えました。

特に不登校の子供のみならず、登校している子供たちの心身の状態にも十分意識を向けることの重要性については、国も30年来指摘しているとおおり、「不登校は誰にでも起こり得る」という基本認識を共有しない限り、子供を取り巻く深刻な状況を全ての大人が自分事として受け止めることは難しいと考えます。

また、昨年4月に施行された「こども基本法」にも触れ、学校教育における子供の人權、学ぶ権利の保障が最優先課題として認識されている点も注目すべきです。

そして信州型フリースクール認証制度の趣旨でもある学校外の学びの場の質を向上させる公的支援の充実や、利用したい子供と家庭への経済的支援の在り方、第5回と第6回の意見交換会でも議論されましたが、高校入試の在り方は、子供一人一人の多様な育ちに合わせた学びの環境づくりを幼児期から高校まで切れ目なく柔軟につなぎつつ、子供の学びへの意欲と自信を育む個別最適で合理的な配慮を伴う包摂的な仕組みづくりにもつながる論点だと考えます。

以上、第2回では、より幅広い視点から当事者本位の意見交換が行われたことで、円卓会議の今後の議論を深めるための糸口がより明確になったのではと考えます。

○荒井座長

ありがとうございました。次に第3回に移らせていただきます。畠山委員、お願いします。

○畠山委員

それではよろしくお願いします。

第3回ですけれども、10月25日に松本県ケ丘高校を会場に、清水中学校の生徒、松本県ケ丘高校の生徒、保護者等38名が参加をして「中学生・高校生・保護者が望むこれからの高校での学びのあり方」をテーマに意見交換をしました。

この会を行うに当たり、中学生・高校生それぞれが一つのテーブルを囲うことが望ましいのではないかとということで事務局とも話をしまして、中学生・高校生が同じグループで、各テーブルでは高校生が司会進行を務めるという形で話合いが行われていました。

その中で出されたこととしましては、県ケ丘高校の探究科の生徒も多く参加をしており、学校は自分の好きが突き止められる場所であってほしいという意見が出されました。テーマを決めて探究をしていく中で新たに発見できたことがあったり、仲間と一緒に活動できたりするなど、とても有意義な時間が過ごせているということでもあります。

生徒によってはなかなかうまく探究が進まないこともあるということでしたが、失敗から学ぶことも大変多く、探究していく時間はとても有意義であるという意見がありました。

中学生からは、探究科というものが中学校にはありませんので、先生が黒板で教え生徒がノートを取るという一方的な授業ではなく、今、高校生が話したような実践的な授業があるといいという意見が出されていました。

自分の好きを突き詰められる授業を実施することは、とても理想的ですけれども、課題

としては、やはり今学ぶべき学習内容と、高校・大学の受験、そして学ぶ環境が大きな壁になっているという意見が出されました。

もちろん現状では、受験と探究活動がなかなか結びついてこないという話があったり、学習することが決められた内容でほとんどの時間が埋まってしまうことが課題であるということが出されました。

環境としては、探究科の生徒からは、調べたり試したりするという施設の整備も、ぜひお願いしたいという話が出されていました。

それからゆつりの創出ということにつきましては、やはり生徒も教師も大変忙しいと感じているという意見が出されました。県ヶ丘高校の先生も、清水中学校の先生も、一つのテーブルで話をするという場面もありました。

生徒と先生がゆっくり話をする時間がなかなか取れないので、そんな時間が欲しいという意見も出されていました。今の学校では時間を確保することが難しく、各学校で会議の精選をするなど、できるだけ生徒と関わる時間を増やそうとしていますが、登校してから下校するまで時間に余裕がないという話が出ていました。

その他の意見としては、中学生は、やはり校則について話題になりました。例えば休み時間にはほかの教室に入っていけないという校則がどうしてあるんだとか。持ち帰りのICT機器の使用時間は夜8時までと学校で決められているけれども、塾から帰ってくればもう9時だとか、いろいろな校則に対して厳しいんじゃないかという意見も出ておりまして、もっと自由な学校にしてほしいという意見も、中学生ならではかと思えます。

参加された先生からは、教材研究等をもっとやりたいんだけど、時間が確保できないという話がありまして、労働時間を延ばしている一つとしては、中学校においては部活動ではないかという意見が出され、働き方改革に関する意見も多く出されていました。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。次に、第4回の意見交換会に関して、武田委員から御報告をお願いいたします。

#### ○武田委員

第4回は11月14日にこの会場で行われました。第4回の最大の特徴は、現場の先生たちの生の声をお聞きするという点でございます。テーマは「教員の理想とする、これからの長野県での学びとは」ということで意見交換会を行いました。

現場の先生方の理想とするこれからの長野県の学びということですが、キーワードだけお話ししますが、「学びを楽しむ」「学ぶことを自由に楽しむ」「授業効率のみを追求するのではなく、子供にとって自由な活動を行うことが重要」「子供が楽しく自由に学ぶ」ということが多く出されました。この裏側には、現状子供も先生方も何らかの不自由を感じているんじゃないかということだろうと思えます。

それから二つ目として、「子供たちが大人に信じてもらっているという安心感」「自分の気持ちや悩みを受け止めてくれる大人がいる」「様々な関わりを生み出していく」等がキーワードとして挙げられると思えます。安心や関わりなど、子供の周りにおける人間関係に現場の先生たちも非常に関心を寄せていることと、もう一つは、先生たち自身も同僚と

の関わりの希薄さを感じているのではないかと思います。

それから三つ目として、教員にやりたいことができる余裕を生み出す。やりたいことができる心の余裕、時間の余裕と、よく言われます現場の教員の多忙化、あるいは多忙感ということが出されております。

これらを実現するために乗り越えていくべき課題ということの議論でありますけれども、まずは、教員自身が主体性を発揮しやすい職場をつくっていくことであるとか、教員同士が本音で語る場をつくる等、もう一つは、やはり教員の働き方改革と教員の自由な時間をつくっていくということが出されました。先生たちの勤務状況の厳しさとか、時間や課題に追われている現状が浮き彫りになったのではないかと思います。

それから、もう一つの課題解決の方向ですけれども、学校や教員にある寛容さを高めていくということで、外部からの批判とか辛辣な言葉が増えている。そういった外部からの声に、教員がおびえていたり、守りに入っていたりということがあると。そういった意味で、批判に対処していくということも学校の教員としては必要で、1人の教員が孤立しないようにとか、過度な批判や誹謗中傷に対応できる仕組みづくり等を言われました。

それからもう一つとして、教員のやっている教育活動が、受験の結果とか通知表とかテストの結果等で測られてしまうということで、自分の目指す教育になかなか向かえないという、学校や教員に対する厳しい目というのが、やはりその背景にあると思います。

それから第1回でも出されましたが、中山間地での学びについて話題になりまして、そこで出された意見は、現状、中山間地の学校は経験の少ない若い教員と管理職が大半を占めるという年齢構成の二極化になっている。ミドルリーダー・中堅の教員が少ないということが出され、僻地や山間地に教員が行かない現状を改善していく必要があるのではないかとということが出されました。

まとめとして、「でこぼこ理論」とおっしゃってましたけれども、人間は全てでこぼこがあるわけで、それを画一的、均等的な教育の中に押し込めようとすること自体に無理があって、そろえるのではなくて違うことが当たり前为学校にしていくことが大事だという意見でまとめられるのではないかと思います。

私の感想ですけれども、冒頭申しましたように、学校現場で働く先生方に多く参加していただきました。厳しい現状の中で先生方は何とかしたいんだと思っているのを強く感じました。最後に申しました「でこぼこ理論」ではないですけれども、先生たち自身にも足りないこと、できないこと、あるいは失敗等あるんですけれども、それが指摘されていって先生たちが萎縮しているという現状を、やはりその先生らしさがもっと大事にされていくような風土というか、文化、雰囲気をつくっていくことが重要だと感じたところでございます。

○荒井座長

ありがとうございました。続きまして、第5回の意見交換会に関して、岩瀬委員お願いいたします。

○岩瀬委員

よろしく申し上げます。12月6日に軽井沢風越学園で第5回の意見交換会が行われまし

た。

長野県では、第4次教育振興基本計画の中で個人と社会のウェルビーイングの実現と、探究県ということをやっています。意見交換会を実施するに当たって、この二つを体現するような場にしたいと考えました。

そこで、軽井沢風越学園の小・中学生にこの会自体をつくってみたい人を募集して、小学校5年生から中学校3年生の17名の子たちとプロジェクトチームをつくって、1か月かけて準備をしました。

どういう問いで話すか、どういうプログラムにしたらいいか、問いからプログラムを運営、当日の進行まで全て子供たちが行う。つまり子供たち自身がコミュニティづくりや場づくりに参画することを通してウェルビーイングを実現する、あるいは県民意見交換会をどのような場にすればいいか、探究そのものをするんだということを大事に行っていました。

当日は、子供約20名と大人約20名の中で、大きい問いとしては、「私たちが考える理想の『学びの環境』とは」ということで議論を重ねてきました。各グループでは、子供たちがグループファシリテーターとなって進行する形で行われていました。今ちょうど動画が流れていますが、あのような雰囲気、大人と子供が混ざってやっていました。

その中で出た意見はここに大きくまとめていただいています。一つ目は、様々な人や物との出会い、実際に触れて学ぶことができる環境。これは子供たちの中からもたくさん出ましたが、学校に集まる意味とは何だろうか。やはりそこはコミュニティで学ぶということ、人と学ぶということ。あるいは本物の本、本物の素材、学習素材、様々なものに触れるということが学校の意味ではないか。そこをもっと深めていったらどうかというのが出ました。

二つ目は、やってみることに挑戦でき、何度でも失敗できる環境。探究するというのは、そのプロセスそのものだと思うんです。それが学校の中でどのように保障されるかということ。

それを支えるものとして、三つ目に、安心・安全で自分を受け止めてもらえる環境。子供たちの中からは、「全肯定される場所」という言葉も出ましたが、自分の存在そのものが肯定される学校とはどのようにあったらよいかという話も出ました。

そのための大事な要素として、4つ目に、比較が生じない環境。同じ年齢だからといって、早い・遅いとか、できる・できないではなくて、自分のチャレンジそのものが肯定される、自分がやりたい、探究したいものが肯定されるような学びの環境に学校がなっていくといいのではないかと話が出ました。

五つ目として、適度なルール、子供と大人のフラットな関係性。今回の意見交換会で大事にしたことは、大人と子供がフラットに学びの環境はこうあるといい、これから未来の学校がこうなっていくといいというのを話し合うということでした。子供たちも大人もその場でお互いの真剣な議論の中でエンパワーされていて、本当に一緒につくっていけるパートナーなんだという実感を得たと思います。そのような実感を得る子供たち、要は、自分たちは学校や社会の作り手であるんだと実感できるような学校が、どのようにしたら増えていくのかというような議論も出ました。

最後に、自分の得意がより評価される高校入試。今回この対話に参加した子供たちは、中

学校3年生も何人かいたので、何か自分たちがやってきた探究のチャレンジ自体を見てもらえる高校入試の在り方を検討してほしいという声も出ました。

全体を通して、端的には、子供も大人も自由にチャレンジできるような学校、学びの環境を、どのように私たちが、仕組みやルール、施策によって支えることができるかというのが、大きな問いとしてこの場から私が受け取ってきたことです。

この会の最後に中学校2年生の男の子が、全体のまとめで、「これで長野県の未来は明るい」と言って会場が大爆笑になったんですけれども、何か本当により良くしたいと思っている子供たち、そして大人の声が、本当に実際の形として実現されていくことを期待できるような、未来を感じるような場だったなと思います。

○荒井座長

ありがとうございます。同席いただいております浦野委員からも、振り返りをお願いいたします。

○浦野委員

お願いいたします。私は感想という形になってしまいますけれども、初めて軽井沢風越学園に行かせていただいて、この会が生徒さんたちの力でファシリテートされ進行されているところにとっても感動しました。それとともに、子供たちの可能性の大きさということをとっても感じました。

学校にいと、どうしても教員が教える、子供たちは教えられるという形があるんですけれども、この会の中では、子供たちから教えてもらうことがたくさんあったと感じています。

子供たちの中から出ている意見は、実は第4回目の概要で話していただいたこととほとんど通じるようなことであります。武田先生からお話いただいた先生方から出ている意見がありましたが、子供さんたちも同じような意見を言っておられました。フラットな場であるからこそ、子供たちは自分の本音を発言できたと思います。そのベースには、自分が言ったことが否定をされない、安心・安全があるというところで、子供たちも本当に自分の持っているものを十分に発揮できたのではないかと感じています。

それとともに、探究をしていく意欲がすごく強いなと子供たちから感じました。これは議論からではなく、授業の様子を見させていただく中で、子供たちが自分で問いを持って学んでいく姿がとても見られました。じゃあ教師は何をやったらいいのかということを考えたときに、つまりいたときに、教えるのではなく一緒に寄り添っていく教師の在り方ということも、そこからすごく感じさせていただきました。

そこを乗り越えることによって、子供が自信を持っていくことや、探究をさらに深めていくことにつながると感じさせていただきました。

○荒井座長

ありがとうございます。最後に第6回の意見交換会に関して、村松委員、御発言お願いいたします。

○村松委員

それではよろしく願いいたします。第6回は1月17日、この会場のすぐ近くでございますが、信州大学教育学部で開催いただきました。

資料にもありますように、学生も学部の1年生から4年生、大学院生が参加しました。大学院生もストレートの子だけではなくて、さらに現職の先生と、非常に多様な参加者が来ました。特に1年生においては、全学部が松本で学んでいるんですけども、わざわざ松本から参加してきてくれた学生もいました。

当初、実は非常に申し込みが伸び悩んでおりまして、学生に「どうなの？」聞いてみたら、「知事と一緒に話をするなんておそれ多い」というのが学生たちの声でありましたが、「いやいや、そうでもなくて」みたいな話をしましたら、おかげさまでいろいろな層の学生たちに参加いただいて、活発に意見交換し、盛り上がることができました。

テーマとしては「教員の魅力と私たちが考える教育の未来」ということで、本当に円滑なファシリテーションをいただきまして、和やかなうちに進んでいきました。

最初のところでグループとして、あなたにとっての「こんな教員になりたい」、そういう教員像みたいなことを自由に語る。アルクマのぬいぐるみを渡しながらいろいろ皆で意見交換し合ったんですけども、例えば、子供中心で子供が好きでやれる環境をつくってあげるとか、子供を縛らずに自由に学ぶことを尊重できる教員であったりとか、子供たちと共に成長する、子供たちの未来を考えて必要な経験をさせてあげるといった、子供を第一に考え、新しいことに挑戦し、学び成長し続ける教員、こんな教員になりたいなど、いろいろな声が出てまいりました。

それを受ける形で、話題提供としまして、私どもの長野地区の附属学校の北澤校長のほうから、教育実習での報告をしていただきました。御存じの方も多いかと思うんですけども、私どもの学部では附属学校で皆、教育実習をやっておりまして、そこである意味非常に鍛えられ、力をつけてくると。これが学部としての伝統的なところであったんですが、大分転換期を迎えています。

教育実習前に学生たちにアンケートを取ったところ、教員になりたい子は半数いない、迷っている学生も3割ぐらいいる状況でした。そういうものを踏まえたときに、教育実習自体が、従来の鍛える教育実習から、教員を目指してなりたいと思えるような教育実習への転換ということで、附属学校のほうで取り組んでいただきました。

とりわけそういった教職員に対する不安や悩みを最初に出してもらって、それを実習の中で、附属学校の先生方と小グループに分かれていろいろ語り合うこととか様々な内容を改善いただきました。

そういった成果もありまして、なりたいと思っている学生が、終了後には15%、30名ぐらいに増えたりとか、迷っているという学生が教育実習を終えたところで半分近く減少したりというようなことも出てまいりました。

そういった報告を受けまして、会の後半は、この教育並びそして教員に関して、もっとこうしたらいいということについて、椅子で丸く囲んでどんどん発言してもらおうという、まさに円卓の形で意見を出してもらおうということを行いました。

例えば、先生方に余裕がなく、教員の余白を確保することが必要だとか、入試や評価のための学びから脱却していくことも大事であると。それから教員の職業のイメージを向上

して、周囲の人に応援してもらえる、なりたいなと思える職業に、かつてのイメージをもう一度取り戻していかなければいけないということ。これは、学校や教育委員会だけでは難しいところがありますので、学校と学校外の相互理解、連携の促進が非常に重要であるということ。

そして何よりも、自分自身が受けた教育を再生産してしまうなんていう話もあるんですけども、そこから脱却して、新しいことに先生方が挑戦できる環境を整えることが非常に大事ではないかというお話もされました。

まとめとしまして、先ほど岩瀬委員からもお話がありましたけれども、教育の担い手ではなくて、教育社会のづくり手として共に進んでいてもらいたいということ。また、箱根駅伝の話ではないですが、教員の魅力を取り戻すぞ大作戦のようなことをみんなで協力して、もう一度輝く職業としてやっていきたいなということ。

また、荒井座長からも、教育はつくってもらうものですとか、働きがいと働きやすさ、地域と保護者の連携を深めることや、入試制度のこと等おまとめをいただきました。

全体を通して、これは委員であると同時に、私も今学部の取りまとめで、学生たちの声を聞いていて非常に感じたことですが、学生たちが均一化してきたのではないかということや学部の先生方はよく言われていました。ところが、今回の意見交換会での大きな発見として、非常に多様な子たちが結構いるんだなと感じました。直近でも新聞に載りましたが、フリースクールの運営に関わっている学生がいたり、2年生の子でしたけれども、これから1年間休学して、多様な経験を積むために、社会貢献をして戻ってきたいと言っている子がいたり、日本の教育を学ぶために海外から入学し、日本の教育は素晴らしい、学ぶべきこともあるんだという学生もいたり、想定以上に多様でした。

どうしても、免許取得などを考えると、単位を取らなければいけなく、課題に追われることが多いんですけども、そういうものを超えて、今回行った意見交換会のように、本当に自由に語り合える場というのは、改めて大事だということを確認させていただきました。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

以上、6回にわたる意見交換会の振り返りをさせていただきました。このほか資料1の8ページ目になりますけれども、意見交換会后に、ホームページ上の回答フォーム等でいただいた御意見も記載しております。テーマとしては、第1回、第2回と関係する御意見いただいております。ぜひ御覧ください。

ここでオブザーバーから、ご感想などいかがでしょうか。

#### ○阿部知事

皆さん、ありがとうございました。私も2回ほど意見交換会に参加させていただきました。先生方のお考えをお伺いするという場面と、信州大学の教育学部の学生の皆さんを中心とした会だったんですけども、私の感想は、今日ほかの会場でのお話も聞いていて思ったのは、子供たちも、保護者、学生、先生も、考えていることはほとんど同じではないかというのが私の受け止めです。

例えば、学校をもっと楽しくしましょうというのは、先生にとっても子供たちにとっても、という共通点もありますし、型にはめられた形ではなくて、先生や子供たちにとってより自由な学びが必要ではないか。あるいは学校の中だけで完結するのではなくて、もっといろいろな大人や地域の皆さんと触れ合っていくことが重要ではないか。

私も県民の皆さんとの対話集会や市町村長の皆さんとも対話をさせていただく中で、いろいろな教育についての問題提起、課題の共有をさせていただいてきています。結果的に皆さん、立場は違っても同じ問題意識を持っているんだなというのが、今日皆さんからのお話を聞いての受け止めです。

じゃあ、何でそれがみんなが願う方向に行かないのかと。たぶんそこが私がオブザーバーで参加している意味なんだろうなと思います。いろいろなルールや仕組みを何とかしていかないと、多くの人たちが願う形が実現していかないのではないかと思います。

そういう意味で、非常に私としてもいろいろな気づきをいただきましたし、教育政策、学校教育にとどまらず全体的なことを考えていく上では、このいろんな場での様々な方々との意見交換は、すごく意義があったのではないかと受け止めさせていただいています。ありがとうございます。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。9月1日の第1回円卓会議以降、6回にわたる意見交換会を開催させていただきましたが、本当に多様なお立場の方に、多様なテーマで、多様なスタイルで実施することができたのではないかと思います。こうした当事者性を担保した意見交換は、非常に有意義なものとなりました。改めて感謝申し上げます。

内容に関しても、長野県教育委員会が公表している第4次教育振興基本計画、繰り返すようになりますが「個人と社会のウェルビーイングの実現 一人ひとりの『好き』や『楽しい』、『なぜ』をとことん追求できる『探究県』長野の学び」を実現していくといった方向性をめぐるっては多くの方が共感的に受け止めていただいていると感じました。

今後はこの方向性をどのように実装していけるのかがポイントになります。教育関係者の「エンパワーメント」と呼んでいいと思いますが、安心して物事にチャレンジしていくことができるための物理的・時間的な・精神的なゆとりを条件整備として整えていく必要があると感じています。

### 3 今後検討すべき方向性について議論

#### ○荒井座長

それでは、続きまして、後半の議論に移ります。事務局から資料説明いただきます。

#### ○事務局

では、資料2を御覧ください。9月に開催されました第1回信州学び円卓会議の委員の発言概要をまとめた資料になります。発言概要は記載のとおりでございますが、一番下の欄、当日の議論のまとめとしまして、教育に関するこれまでの当たり前を変えていくこと、二つ目としまして、学校の自治、教員の自由を保障するため、教育システムの在り方を問

い直していくことの2点が共有されたところでございます。

続きまして、資料3を御覧ください。県民意見交換会における代表的な意見を整理したものでございます。意見の整理に関しましては、先ほど資料2で申し上げました第1回会議のまとめの方向性に沿って整理を行いました。一方で県民意見交換会で多く意見をいただきました資料の右側に書いてあります中山間地域における学びの魅力化、または子供の居場所、学びの継続という項目を新しく事務局で設けまして、学校外、地域を含むその在り方に関する意見として整理をしております。

資料4を御覧ください。今後、円卓会議で検討すべき方向性を共有するために、今までの会議や意見交換会等を通じて出された意見の共通項目を事務局でまとめたものとなっております。説明は以上です。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。資料3が、意見交換会等から出てきた意見を項目ごとに整理したものとなります。そして資料4が、それを踏まえて、共通項目としてまとめさせていただいたものとなります。こちらは論点ではなくて、事実ベースで皆様から上がってきたものをまとめたものとなります。ご承知おきください。

この後の議論では、教育振興基本計画も踏まえて、より学びを充実させていくために、何ができるか、何が必要なのかについて、御意見いただきたいと思っております。

冒頭、オンライン参加いただいております篠田委員から、学校外の学びの在り方について御意見いただけますでしょうか。

#### ○篠田委員

お願いします。今日もオンライン参加で、皆さんと直接お会いできずすみません。私は諸事情があって県民意見交換会にもなかなか参加できなくて心苦しく思っていたんですけども、YouTubeなどで会議の様子を拝見させていただいておりました。

私の立場からすると、このフリースクールところで、多様な学びの継続とか実現というところで意見を申し上げたいと思うんですが、先ほど阿部知事もおっしゃっていたように、私も今回資料を改めて見せていただいて、皆さんが同じ方向を向いて考えているんだなというのを本当に思いました。

それでも、やはり、例えば不登校で悩んでいる苦しんでいる子供たち、先生や保護者の方がいるのも事実であって、それを私たちの役割としてどうしていくかと考えたときには、必要な制度を整えていくこと、それから新たにつくり出していく試みをしていくことは、現実的に必要でやることかなと感じています。

信州型フリースクール認証制度もそうですし、今回の円卓会議もそうですけれども、この会議をきっかけに、県内でフリースクール運営者たちも横のつながりができ始めて、大きな動きになっている、なりつつある感じがあります。

その中で、今日資料も配付していただいていたのですが、信州居場所・フリースクール運営者交流会から提言書を出させていただいています。私も交流会の会員に入れていただいているんですけども、その中で必要な活動の推進や制度の見直しを、民間というか、学校の外から整えていくというところが、まず一つ私たちができることかと考えています。

教育や学びは、人生では二度と戻ってこない、大切な瞬間が今まさに過ぎているという感じかと、子供たちと接していて思っています。その中で、例えばフリースクールでどんな仕組みを整えていったらいいのか、どんなつながりを新たにたつていったほうがいいのかということは今後も考えて前向きに動いていきたいと思っています。

○荒井座長

ありがとうございました。今、御発言いただいた点と関連するのは、資料4の一番下と下から3番目辺りだと思われま。今回のような場をきっかけとして、居場所関係者、フリースクール関係者のネットワーク化が進み、情報共有の感度や質が深まっているというお話をいただきました。

また、他方で、不登校に対するある種の偏見をきちんと正していくための取組も必要だということでした。

ただいま、県民の皆さんの価値観や理解の深め方、あるいは多様な学校やフリースクールや居場所関係者の皆様と協働しながら子どもを支えていくという趣旨の発言がありました。この点と関わって、ご意見はありますでしょうか。

<発言者なし>

では、もう一つの大きな論点として、いわゆる中山間地や小規模校に関連するものがありますが、こちらの部分ではいかがでしょうか。

○大久保委員

先ほど知事のお話もありましたけれども、学生や先生方、我々の思いは全く同じ方向を向いていることはここで確認できました。これをどう実現していくかは、いろいろケース・バイ・ケースがあって難しいと思います。特に私ども、実は数年前に義務教育学校という新しい制度をつくらせていろいろ模索しながらやっていますけれども、ノウハウがありません。逆に中山間地域で出来ることとして、先生たちがやりたい教育を実施するとか、あるいは、今、村では義務教育学校の中に地域が支援するための中間支援組織をつくらせて、そこにいろいろな関係者が入って学校とつないでいく仕組みを形づくりたいということを考えています。

さらに村だけで学校の運営は出来ず、県の教員の先生方が入っていただくので、その際に、先ほど言いましたように経験のある先生、新しい先生、中堅の先生が一緒になってお互いを支え合える環境において、協力しながらノウハウをつくらせていけることがよろしいのではないかとつくづく感じます。

全体の統一ルールというのはなかなか難しいと思いますので、まず中山間地域の場合は、小さな学校でぜひそういったものをつくり上げてといますか、実験してもらいたいと思います。

○荒井座長

新しいチャレンジをするための実験というご提案をいただきましたが、自治体内部にお

いて、行政同士や県に対する要望や期待感などがありますでしょうか。

○大久保委員

地域の中だけでは学校教育はできませんので、やはり県にも積極的に入っていただいて、どういった形の地域をつくっていくか、特に教員の配置については、先ほど言いましたように先生方が自由に教える、先生自身も余裕を持てるような仕組みをどうするか、一緒に考えていただきたいですし、逆に我々の目指している中間支援組織には地域も行政も当然入りますので、そちらにも県の皆さんも入っていただいたり、そうした形で学校をつくり上げていくのはどうかと、今私が思っているところです。

○荒井座長

ありがとうございました。今の部分と関わる論点、御意見としていかがでしょうか。では、村松委員お願いします。

○村松委員

よろしくお願いたします。今、大久保委員も言われました組織をつくっていくこと、連携し合うことはとても大事かと思っております。私自身も、県で高校関係の会議に同じように参加させていただいているんですけども、そこでもやはり小規模校、県境校について、どのようにこれから進めていくか大きな課題になっています。

そのときにここで、資料にあるような自由なカリキュラムとか自由度の高い学び、地域と連携してというのは本当に大事だと思うんですけども、ただ、その点だけでいうと、学校自体が小規模化していく中で、いずれ限界が来てしまうのではないかと。そうなってきたときに、そういった学校を束ねて一つのグループにするとか、ほかの学校と相互にうまくつながっていく仕組みがあれば、ちょうど今私どもの大学でも検討していますが、小中だけではなくて、小中高大でうまくつないでいくような組織や仕組みがあると、いろいろなことで連携しやすい。

個別の学校の対応でやっていくとどうしても限界が出てくると思うんです。個々の先生の実践や頑張りだけでなく、それを支えてくれる仕組み、そこに行政や他の機関もうまく組み込んでいけるといいなと思います。

そういった地域の中での個別の組織と、並ぶ形で全体的に広い面となるような組織、それが縦につながるような展開ができると、今の小規模校の課題には一定寄与できるのではないかと考えております。

○荒井座長

ありがとうございます。基礎自治体の内部での取り組みと、基礎自治体間の関係性の取り組みの両側面があったかと思えます。例えば、篠田委員にお聞きしたいのですが、基礎自治体において行政と学校外の団体はどのような関わりをされているのでしょうか。

○篠田委員

うちの法人は松川町にあるんですけども、規模としては小さく、小学校は2校しかな

い町です。その中で今、うちのフリースクールとはかなり手厚く連携をしていただいています。例えば、教育委員会で、Hugに町費で専門に人を派遣していただいている実際に生徒指導に関わってくださったりとか、町の公用車で活動場所への送迎も、町費の職員の方が担ってくれたりということもあります。

あと学校との連携では、例えば、理科の実験道具や大縄、ミシンなど、民間団体がそろえることが難しい教具や備品に関して、借用書を出して、学校から借りて理科の実験をしたり、大縄をしたりということも実際にやっています。

あとは、学校の先生たちが割と顔を出してくれて、実際に担任をしている子と直接顔を合わせて、学級だよりに載せるイラストを書いてよとお願いしに来てくれているケースもあって、その子は学校には行けないんだけど、イラストを学級だよりに毎週載せてもらえることを励みに学校とのつながりを持っていたりとか、その子が持つ才能とか興味関心が学校の外でもどう発揮できるか、一緒に考え動いていけるところがとても大切かと思っています。

○荒井座長

ありがとうございます。

続いて、三輪委員、村と自治体間の連携の在り方という点では、いかがでしょうか。

○三輪委員

村松委員がお話を出されていましたが、その地域だけという観点ではなくて、もう少し地域間を広げて、根羽村であれば、お隣の平谷村には違う集団があるので、子供同士が何が関わるような仕組みを整えていくことも必要かと思いました。

長野県内はコミュニティスクールも非常に広がってきています。大人が子供に本当にいろいろサポートするような気持ちが広がってきてはいるんですが、子供同士の中で育つ、発見する、か気づくということがあるので、そこをどうつくっていいのかということは大事かと思いました。

根羽村には高校等がなく外へ出て行ってしまいますので、高校や大学生との連携、関わることを工夫したり、あるいは今日岩瀬委員もお越しになっているので、小規模であって横の年齢ごとの区切りが、メリット以上に窮屈さを覚えるということであれば、もっと縦につなげていくような、実験校というお話が先ほど大久保委員さんからも出ましたが、そういったことを県下いろいろなところがつながっていると、教員も子供同士も発見があるのではないかと思います。

その先には、中学の勉強はここまでということ私たち教員自身も捨てて、探究で行くのであるならば、もっと学びたいという子供たちにどんなことが提案できるかということ私たち学べるような仕掛けを何かつくらなければと、お話を聞いていて思っています。

○荒井座長

ありがとうございました。今のご発言は、「行政の広域化」という点とも関わると思います。その点、武田委員、いかがでしょうか。

○武田委員

直接的にそこに行かない話ですけれども、資料3をまとめていただいて、例えば左側のラインボックスの中を見ると、学校の在り方に関する意見ということで、学校の自治を保障するはいいですけれども、教員の自由を保障する、その次の中山間地における学びの弾力化というように、誰がやるのかという話なんです。

私が教員になったのが昭和50年代の後半で、当時ちょうど学校が荒れ始める、校内暴力とか、荒れる中学校とか、当時は登校拒否とか、あるいは落ちこぼれ、落ちこぼしというので、それらの原因が結局学校教育にあるという中で、学校に何とかしろという声があり、これは今でもずっとそうだと思います。

そうすると、学校はこの40年間、50年間何をやってきたかという、それに対して対応してきたわけです。対応するということは何らかの批判を浴びないようにしてきた。そういう中で、今、学校は、資料にも書いてあるように開かれていないとか、敷居が高いとか言われるけれども、やはり学校は身を硬くしている。今、何かあると「学校に」となるので、「何とか教育」とか「何とか育」という言葉が幾つあるか。夏休みとかに学校の子供たちにおねいねと頼まれる作文やポスターがどのくらいあるか。

そういうことを考えたときに、これがただ出ていくと、「また学校にやれと言うのか」と、「また学校に仕事を増やせというのか」と学校には捉えられる、先生たちにも捉えられる。これは全く逆効果だと思います。

ですからその議論の行き方として、こういうことを目指しているんだけれども、学校以外のところはこんな資源、こんなことで協力していくとか、こんなようなことをやっていくので学校も一緒にやってみましょうみたいな話の持っていく方、見せ方にしてくれないと、委員の皆さんはほとんど思っていないと思うんですけれども、この資料が出てしまったら、学校が何とかしろと、学校はたぶんそう取る、先生もそう取ると思います。

ですので、ここの会議の良さは、県民と共につくっていくとうたっているもので、今の中山間地の問題も、村松先生がおっしゃったように、根羽学園だけで何とかしろという話ではなくて、こういうものをつくって一緒にやってみましょうとか、こういうものをつくれれば学校もできますよみたいな、アイデア出し、議論をしていくことが必要かと思っています。

○荒井座長

ありがとうございました。この他、学校の学びを拓き、多様な主体で支えていくという観点で、竹内委員、いかがでしょうか。

○竹内委員

ありがとうございます。今の武田委員のお話にちょっとつながるかなと思うんですけれども、もしかしたらちょっと突飛な意見として聞こえてしまうかもしれませんが、長野県は77市町村あって、一つの町、村で一つの小学校とか中学校というところが他県に比べて極めて多いと思います。

社会的共通資本という言葉もありますけれども、逆に、小規模学校の良さ、多様であるということ、社会全体、長野県全体で共有できる一つの資源という観点で、現状の制度では町立や村立の小学校・中学校で、教育委員会がそれぞれの町村にありますけれども、

例えば、広域的なネットワークをつくって、広域教育委員会で広域立の学校をつくり、それぞれキャンパスは町や村にありながら、キャンパスごとに子供たちが多様な学びを選びながらオンラインやリアルで巡回できるようなこととか、思い切った広域的な視野で、教育資源をいかに最大限活用するかという発想も持っていてもいいのかなと思っています。それはたぶん、長野県だからこそできる一つの仕組みにもなるかと、今お話を聞きながら少し想像しました。

○荒井座長

ありがとうございました。地域が持っている資源を分有・共有していくことについては、まだまだ自治体間の壁があるかもしれないと感じています。

では、近藤委員お願いします。

○近藤委員

今の竹内委員の話ですが、自治体を超えた学校をというのは大変難しいのが現実です。例えば長野市では、今、小川村と中条の子供たちが行き来をしようということで、組合立教育委員会をつくると大変になってくるものですから、委託制度という形でやっています。

今から20年ぐらい前になりますが、私が勤めていた南信の学校でも、隣町の学校と一緒にやろうということで、村のほうは村のバスとかで行き来がしやすいものですから交流をやってみたり、村の文化祭と学校の文化祭を一緒にやろうと、中学生が企画立案の中に入ったり、将来村に残ってもらいたいんだけど、村の大人の人たちと一緒に活動をしていく経験があれば、何かあったときには村に戻ってきてくれるのではないかという期待を込めてやったことがありました。

当時子供たちは、伝統的に続いてきた地域のお祭りを、自分たちが参加して作り上げるんだということで意気込んで、大変意欲的になって、先ほどからお話があったように、特に小規模校では地域の方と一緒につくっていくのがいいのかなと感じています。

ただし、難しいのは人間関係という点で、どう広げていくかが問題です。高校へ行ったときに人間関係が大変広がるわけです。そこら辺が子供たちのキャンパス校同士をどうつなげていくかで、ある程度の発達段階に応じたところまでは必要なんだろうけれども、ある発達段階を超えたところからは、やはり少し大人数の子供たち同士で学び合うところがないと、いつも対大人と子供という中で育ってしまうのは、どうかな、ということも考えたりします。

○荒井座長

ありがとうございます。浦野委員は、多様な場で子どもたちが学び育つという実践を積み重ねられていらっしゃるかと思いますが、いかがでしょうか。

○浦野委員

特別支援学校は、教育課程等については割と自由度があるかと思っています。子供の本当にやりたいことを大事にしながら学習ができるという面があるかと思っていますし、飯田養護学校は県立学校であるんですけれども、市町村からも御協力をいただいているという部

分があります。

学校だけでやっていったら、逆に子供たちの力が十分に伸ばしきれないと思っているものですから、医療とも連携させていただいていますし、行政的な部分で福祉のサービス等も利用させてもらっています。

そういう連携を持つことによって、子供さん一人一人の力は伸びていくので、ある面で言ったら特別支援学校は大きいコミュニティスクールみたいな形で今やらせてもらっているのかと思っています。軽井沢風越学園は小中学校の教育課程に準じてやっている形ですけども、子供たちの探究をととても大事にしながらやっていました。特別支援学校とは違う面で、小中学校に近いところでどう工夫をされてやっているのかお聞きするとすごく参考になるのではないかなと。自分自身はとても参考になりましたので、岩瀬委員お願いします。

○荒井座長

いかがでしょうか。

○岩瀬委員

なんかいきなり重いパスが来ました。先ほどの議論ともつながってくるように話せたらと思うんですけども、やはり新しいカリキュラムをつくっていくときに、既存のものをどう変えていくかという発想では新しいもの生まれてこないと思います。本当に探究の学びを実現するためにどのようなカリキュラムがいいのか。その後に整合性をつなげていくという思考の順番はすごく大事で、先ほどからもお話ありますけれども、誰もが学校が変わるといいと思っている。子供も保護者も教員も思っているけれどもなぜかそこに踏み出せない。何がボトルネックになっているのかというのは、結構大事なポイントなのではないかと思っています。

問いを変えるならば、学校が自ら変わるのに何が必要かということです。外から変えよう変えようとどんなものを降り注いでも変わっていけない、また降ってきたとなるので、学校が変わりたいと思うためにどのようなリソースがあるとそこを応援できるのか。言い換えれば、どうすれば挑戦校が増えるのかだと思うんです。

例えば風越学園の視察にいろいろな自治体からも来られるんですが、「でもうちでは無理だ」みたいな話にどうしてもすぐなくなってしまふ、そこで思考が止まってしまうことが結構あります。でもちょっと変わりたいみたいな学校や自治体があったときに、どんなリソースがあるといいのかを考えてみたいんですけども、一つは端的にお金だと思います。学校が自由に使えるお金があること。こんなカリキュラムにチャレンジしたい、こんな人を呼んでみたい、年間この人に伴走してもらいたいということにちゃんとお金が出せる。こんなプロジェクトをやりたい、そこにプロジェクト費が出せるという自由裁量の使えるお金がかなり大事で、実は学校はこれを全然持っていません。

僕が公立で研究主任をやっているときにどうしても来てほしい先生がいて、出せた講師料が3,000円だったりするので、それだとやはり持続可能ではない、ボランティアベースじゃないと学校に関わってもらえないという問題があるので、自由裁量の予算があるのはとても大事なのではないかと思っています。

二つ目は人の部分です。教員の志望者が減っているという問題で様々な施策を打たれていますけれども、端的には魅力的な学校を増やすしかないんです。面白そうだなという学校が増えていくと、当然やってみたい人が増えていく。そこには先ほど言ったお金も必要ですし、もう一つは、いろいろな校長先生とお話する中で、学校のマネジメントに専念したいけれども、忙しくて週2回も空けなければいけないとか、なかなか学校にどっぷりマネジメントに関わることができないというお悩みを聞くことがあります。

では、チャレンジしたい校長先生が本当に学校のマネジメント、学校づくりに専念できる体制をどうつくるかというのも、一つ大きい議論のポイントなのではないかと思います。

人のことに関連しては、教員の自立性をどうやって担保していくか。やってみたい、チャレンジしてみたいという教員が十全にやってみることができるということをどう支えることができるかだと思います。

それは、教員が専門職であるということに僕らがちゃんとリスペクトして、仕組みとお金をつぎ込んでいくこと。例えば、研修をたくさん用意して、「さあ、どれやる？」ではない、自主的に学びたいという教員の思いを支えるような仕組みをどうつくるのかであるとか、あるいはそういう教員が自治体や学校を超えてネットワークとしてつながっていくようなラーニングコミュニティのようなものを、自主性だけに任せるのではなく、仕組みでどうやってボトムアップなコミュニティを支えていくのかであるとか、あるいはこういうチャレンジをしたいという学校をちゃんと支援する専門家を育てていく。1年なり2年なり、ちゃんとその学校が変わっていくことにずっと伴走し続けるような専門家は、実はいそうでそんなにいないです。そういう専門家を育てていって、そういう人たちのサポートを得ながら変わっていくみたいなことも仕組みの中でできるのではないかなと思っています。

もう少し大胆な例で言えば、公設民営のようなチャレンジできる仕組みを思い切って置いてみるということもできると思うんですが、いずれにせよ、挑戦しやすい環境、リソースを用意しない限りは、今持っている小さいリソースで何とかしろというのは、絶対限界が来ると思っています。

幸い私たちは、私立学校で挑戦的なことをやりやすい環境にはありますが、日本全国にたくさん子供はいますし、長野県にもたくさん子供がいます。一人でも多くの子供が幸せな子供時代を過ごせるために、どのようなネットワーク、仕組み、リソースがあるといいのかということ、ここで議論できるといいなと思っています。すいません、直接的な答えになっていませんが、以上です。

#### ○荒井座長

ありがとうございました。

続いて、草本委員にお伺いしたいんですが、学校にとらわれない学びのあり方、地域とつながる学びについては、どのように捉えていらっしゃるのでしょうか。

#### ○草本委員

ありがとうございます。私どもは私学のインターナショナルスクールですので、プロジェクト型学習でいろいろな学びを見つけていくということを追及していております。あ

まり既存の枠組みにとらわれずにという意味では自由度がありますし、先ほど校則の話が出たときにちょっと笑っちゃったんですけれども、うちの学校では例えば校則はいつでも変更可能で、タウンホールミーティングというプロセスがありまして、知事がたまにやっていたらしゃるものからお名前を頂戴したんですけれども、生徒が校則の変更を提案して、民主主義的プロセスを経て採択されれば校則はいつでも変更できますという形になっています。

ただ、そういうことも結局必ずうまくいくかという、独りよがりな提案が出て全然通らなかつたりとか、民主主義って面倒くさいねみたいな話になったりという、それはそれでまた学びになったりということを試行錯誤しながらできる環境にあることはありがたいなと思うんですけれども、先ほどからずっと皆さんの話を聞いていて、まず最初に一つこういう場があること自体がすばらしいなと思って、今までに6回も、たぶん4月ぐらいに白馬にも皆さんにお越しいただいて意見交換会ができればと思っておりますけれども、これだけいろいろな場所で、この大きい長野県の中でこれだけのいろいろな要職に就いている教育界の重鎮の方々が、私なんかが入っているのは本当に申し訳ないぐらいですけれども、いろいろなお話をしながらその方向性を模索していつているということ自体が本当にすばらしいなと思って、こういった会議に参加させていただいてとてもうれしいなと、まず一つ思いました。

知事がおっしゃっていたように、立場が違ってもみんな同じ方向を向いているというのは皆さんの共通認識なんだろうなと思っています。なぜこんなに変わらないのかというのは、一つにはたぶん教育制度が制度疲労を起こしているといえますか、産業革命後のみんなが伸びるときになるべく均質な労働者をたくさん生み出すためにつくられた100年以上前のシステムが、改変を加えられながら今もベースとしてあるからだと思います。

私は、昨日、白馬中学校の運営協議会に出ていたんですけれども、白馬中学校でもいろいろな学びの特性の生徒さんがいて、教室で授業を受けられない生徒さんもいるから、安心していただけるお部屋を今度新しくつくることにしましたみたいなお話があって、今ややはりもう、識字障害や書字障害、スペクトラムの生徒さんなどがたくさんいらっしゃいます。昔もきつといたんでしょうけれども認識されてなくて、昔はたぶん「それでもおまえ、座ってる」みたいな、一つの教室の中でもう1対40ぐらいで無理やり学習をしていたのか、させられていたのかという中で、今こうやっていろいろな特性の生徒さんたちをちゃんと一人一人見て伸ばしてあげようというのを、公立でもすごく頑張っ取り組んでらっしゃると思うんです。

そうは言ってもそういう特性のあるお子さんを別の部屋で学ばせるとなったときに、一人きりで置いとくわけにいかないし、先生たちの数は限られていて、でも外からボランティアを連れてくるといっても、生徒と1対1で部屋に置いておくのに誰でもいいというわけにいかないみたいな。県に加配をお願いしても、先生ももともと数が少ない中で難しいというところで、今までの教育制度の中で、今の時代に合ったものをつくろうとしているのがすごく難しいんだろうなと感じています。

荒井座長から、先ほどエンパワーメントをしていくのが大事ではないかという話があったと思うんですけれども、エンパワーをみんなしたいし、されたいんだけど、やはりおそれがあって、例えばうちの学校も中高一貫校なものですから、もうプロジェクトばっ

かりやるような面白い学びやりますとは言っていますけれども、じゃあどうやって大学につなげるんだろうというのは課題としてあるわけです。大学に分かりやすくうちの生徒たちがどれだけ何を学んできたかということはどうプレゼントするかというのは非常に重要なポイントであって、それは先ほどからいろいろな委員の方からお話が出ているように、探究学習いいよねという話はたくさんあるんですけども、それは高校入試や大学入試のときにどう見てもらえるんですかみたいな、ひいては社会に出たときにその人はどう評価されるんですかみたいなところがみんな不安なので、既存のシステムからはみ出ちゃいけないみたいな恐れがあって、エンパワーできないし、されにくいところがあるのではないかと考えています。

それに対してどうしたらいいという答えはないんですけども、一つ思うのは、やはりみんな感じているのは、今 AI がどんどん台頭していて ChatGPT とか私も活用させていただいて、素晴らしい文章が返ってきたりするわけです。子供たちにフリーに使っていいというわけではないと思うんですけども、それを使いこなせる人を私たちは育ててあげなければいけないんだと思うんです。最初からそれに頼って、よりよい文章が何かということ吟味できないまま全部 AI 任せにするのはよくないと思うんですけども、ある程度の基礎力がついたときに、そういったテクノロジーも活用できるような人材をつくらなければいけないとか、たぶん我々が教育を受けていた頃と今のこういう人を育成していないといけないなみたいなものはかなり変わってきているのではないかなと考えています。

なので、例えば IB、国際バカロレアでは学習者像をとって、すごく素晴らしい探究する人、知識のある人、考える人みたいなことを分かりやすく、こういう人を私たちは育成しようと思っているからこういう教育をやりますということを出してらっしゃいます。私たちの中であるべき人間像、こういう人を今後育成していくことが大事なのではないかみたいなことを、ある程度の共通認識ができていれば、その行き方は、例えば中山間地域であればその地域の身近な大人から学ぶところから展開していてもいいと思いますし、もっと大きいところであれば、別のよりよいやり方など、たどり着き方は違うにしても、より自由な学びができると思います。それぞれの学び方でもお互い認め合える環境ができたらいいのにと、皆さんのお話を聞いていろいろ考えていました。

みんな目指しているところはとても近いと思うので、先ほど岩瀬先生がおっしゃったような金銭的なものやスキルなど、障害となっているものはリソース的な部分ももちろんあるんですけども、私たちはどこに向かっているんでしょうというのが、もう少しみんなの中で明確になって共通認識として持てるようになると、よりそれぞれの人が自分の強みや得意なところを發揮しながら一緒に向かっていけるんじゃないか、そうなったらいいのになと、今お話を聞いていました。

○荒井座長

ありがとうございます。知事、どうぞ。

○阿部知事

草本さんのおっしゃっていることに、全く私も賛同するところでありまして、私はずっ

と先生方の話を伺っていて、学校の先生の自由を保障するとここに書いていますけれども、それがすごく重要だと思っていますし、学校の自治をもっと尊重することが大事だと思っています。

ただ、そのための前提条件というのがあって、どういう教育をやるのか、どういう学びの場にするのかということは、やはり子供たち、保護者、あるいは地域の人たち、そういう人たちとのコンセンサスがないうまに学校の独善的な自治に陥ってはいけませんし、逆に学校の先生たちがやりたいようにやっているみたいな話でもいけないと思っています。

この教育の問題は、当初から、なぜこの学び円卓会議というのを県がつくっているかというのは、私だけでも変えられない、大体県の政策分野は私の権限になっていることが多いですけれども、教育だけは隣の教育長、あるいは教育委員会と責任を分担していますし、また義務教育学校になれば市町村が設置主体になっています。

保護者の方たちと話していても、この問題は一体誰に言えば解決するんだと。先ほど大久保村長がおっしゃったように、例えば義務教育学校だったら、大久保村長と教育長がこういう学校をつくらうといったときに、ある程度自由度が高くなければいけないんですけれども、今のシステムは、文部科学省が学習指導要領を定めて、これをちゃんとやりなさいということが言われて、学校の先生の人事は県の教育委員会が権限を持っていて、極めて責任と権限が分散化されています。安定しているときはこの分散化システムは、誰か特異な人が出たときに教育を混乱させないという意味では非常にいい制度だったのかもしれないんですけれども、まさに今日皆さんからも出ているように、新しい学びをつくらうといかないといけないというときには、極めて足かせになっているというのが、私がずっと主張していることであります。

先ほど申し上げたように、意見交換で出てきている意見は、本当に多くの県民の皆さんがそうだなと思う方向であると思っています。私がこの場で皆さんと話さなければいけないのは、じゃあこういう問題、課題があるけれども、それを一体どうやって改善していくんですかと。どうやって長野県から新しい学びをつくらうのかということをしっかり考えないと、たぶんここまでは来れません。こういう問題、課題があっても、みんな同じだと、じゃあどうするのかというところが突破できないので、日本の教育は全く変わらないんだと私は思っています。

そういう意味では、資料4の共通項目みたいなものが、この場でまずこういうことを一緒に考えていきたいと思いますと共有されるのであれば、次のステップで誰がどう動くのか。例えば率直に言って、入試制度は私は全く関わっていませんが、問題がいっぱいあるんじゃないかと思っています。

先ほど、実は午前中県内の何校かの学長の皆さんと少し意見交換をさせていただきました。私から幾つか問題提起をさせていただきましたけれども、例えば今の大学入試の在り方が実は高校教育だったり、中学校の教育に影響しているので、本当にこの入試の仕方をどう思っているんですかという話をさせていただきました。例えば、一般入試で入ってくる子供たちよりも、推薦であったり、AO入試みたいな形で自分の関心事がしっかりある子供たちのほうが、入ったときの学校の成績はあまり良くないかもしれないけれども、非常に伸びるということをおっしゃっていました。まさにそうなんだろうなと私も思って頷いていたわけなんですけれども、先ほど草本さんがおっしゃったように、どういう教育、学び

をするのか、どういう人を育てていくのかということと、今の入試制度をはじめとするシステムが本当に適合しているのかということをもう一度問い直さなければいけない。

皆さんの問題意識は同じになってきていると思いますけれども、そのためにどういう学びが必要なのか、どういう教育にするのかということの議論がまだ薄いところがあるのかなと私も思います。

そこがはっきりして、県民の皆さんとか保護者の皆さん、あるいは学校の先生方も、そうだねということで共有されれば、あとは各地域や学校などでそれをどうやって具現化するかということについて、自由度をもっと高めて、そこで議論していただくという形にしていかないといけないんじゃないかと思っています。

要は、この問題は次のステップとしては、どういうプロセスが必要なのか、あるいはどういう仕組みをつくっていくのか、その前提として草本さんがおっしゃったように、我々の到達目標は何なのかということをはっきりしていくことが必要かと思ってお話を聞いていました。よろしく願いいたします。

○荒井座長

知事にお伺いしたいのですが、これほどまでにリソース不足という、資源が足りていないという意見が多いのですが、政治家として、どのように捉えられていらっしゃいますか。

○阿部知事

リソースが足りないというのは、人とお金ということですよ。

○荒井座長

端的に言えばそうです。

○阿部知事

これは、私はやはり分権、自治とか、キーワードは「自治」「自由」だと思っています。要するにお金を出す人がコントロールしているのが日本の政治システム、行政システムになっています。そういう意味では、例えば、この間も規制改革でもう少しオンライン学習を柔軟化してくれというのを長野県から要望しましたけれども、教員の基本的な配置基準を文部科学省が決めているので、なかなか自由に我々ができないと。本当はもっと現場で、例えば私はずっと市町村を回らせていただいて、小規模校の教員配置が非常に手薄だということをいろいろな首長の方からもずっと言われていますし、保護者の方からも言われています。

じゃあ、それはどうすればいいのと、今のシステムを前提とすれば、教員の配置基準の国における考え方を変えてもらう必要があるんじゃないかというところに行くと思います。ただ、そんなことをやっていけば今と同じことの繰り返しでありまして、そもそも、例えば子供の数が何人いるのであれば、教員の配置基準なんか決めないで、これだけ教育財源として一般財源で県と市町村に配ってくれば、あとは私と大久保村長で、教員にどれぐらい割いて、学校の建設とか運営にどれぐらい割いてということが出来ますけれども、学校をつくる補助金、教員の人件費、全部縦割りでコントロールされているので、非常に自

由度が少ない。

ここまで言うと、本当に地方自治の議論の話になってしまいますけれども、そういうことを前提としながら、今の制度の中でもできることはまだまだたくさんあると思っています。そういう中で、最大限やれることをやった上で、全国レベルでの制度改革をどう求めていくかというところまでつなげていかないと、たぶん日本の教育は永久に変わらないのかなと思っています。

資源のところは、例えば教員の僻地手当は長野県は非常に低い水準です。これはいろいろところで議論になっていて、市町村長の皆さんからも、議会からも要請をいただいている、私は上げていくことについてはやぶさかではありません。ただ、県の教育委員会に私から言っているのは、とはいえ、全国平均の中で低い僻地手当を単に上げるということだけで本当にいいのかというのが私の問題意識で、手当を上げることが目的ではなくて、先ほど来問題提起をしていただいている、本当に中山間地で教育に携わる先生に意欲を持ってもらえるようにするにはどうしたらいいか。これは単に手当だけの問題ではないと私は思っています。人事政策の在り方とか、手当以外の処遇の問題とか、あるいは勤務条件だとか、そういうことを全体的に考える中で、僻地手当の問題を考えていくということが必要だと思います。

そういう意味で、この教育の問題は、入試は入試、不登校は不登校、発達障害支援は発達障害支援というように、どうしてもばらばらに議論されることが多いですが、例えばとりわけ学校に行かない、行けない子供たちの問題というのは、まさに私は学校の本体の問題だと思っていますので、そういう意味ではもっと全体的な考え方を整理した上で、その中でのパーツだということを意識しながら議論を進めていくことが必要だと思います。

オブザーバーなのにいろいろ話して申し訳ないですけども、私の問題意識は、この円卓会議は非常に、荒井座長にも進行いただいていい形で進めていただいているということで感謝をしていますので、ここから次のステップをどうするかというところが知恵の出どころかと思っています。その辺を御議論いただければありがたいと思っています。

○荒井座長

ありがとうございました。畠山委員、お願いします。

○畠山委員

県民意見交換会に何回か出ているんですけども、学校を出るときに先生方から、「校長先生、その会議やると学校は変わりますよね？」といつも言われて出てきます。本校のことですけども、先生方もこの会議があって学校の制度や仕組みが変わっていくことをとても期待しているということは、やはり学校の中に課題が多いということだと思います。

第4次長野県教育振興基本計画の中で、探究県という言葉がたくさん出ています。「一人一人が自分の好きなこと、楽しいこと、なぜと思うことに浸り、追究する探究が大事だ」ということで言われているわけですが、やはり先ほど武田委員が言っていたように、資料3にあるところだと、好きということを突き詰められる授業、子供が選べる授業を学校が仕組んでいってくださいということになったときに、やはり現状ではなかなかそういう時間が創設できないということがあります。

中学校の場合、1,015時間が全ての教科の時間と決められておりまして、それを消化するために登校日数等を決めて、今大体205、6とか公立学校はあるわけですが、学級閉鎖とかの時間も考えながら少し余剰を取って各学校で計画しています。風越学園さんでは、行事を精選されていたり、今の仕組みの中でも工夫できる場所はあるかと思うんですけれども、実際に学習内容が削減されたときに、高校入試においても問題ないということになったり、目に見えるところが動いていかないといけない。そうなれば学校でアイデアを出して探究についてそれぞれやっていくということではできたりします。もちろんお金も必要だったりしますが、現場の先生たちも、どうしても出口の高校入試を考えて中学は授業をしていかなければいけないという点がありますので、その辺も合わせて変わっていく必要があると思います。もちろん日々の授業を探究的にということも、それぞれの学校でやっていくわけですが、本当に好きなことを突き詰められる時間をとることであれば、少しそういう内容のほうも工夫していかないといけないかなと感じています。

○荒井座長

ありがとうございました。

○阿部知事

せっかく畠山校長がおっしゃっていただいたので、これは具体的なテーマで話していったほうが良いと思います。今お話しいただいた点は、私もすごくいつも問題を感じていて、学校の先生は大変だと言っていて、片方で、子供たちの自由な教育、探究的な学び、もっといろいろな学びをしていくんだといったときにどこまで本当に学習時間の縛りがあるのか。これは学習指導要領があるけれども、例えば自由進度学習でかなり柔軟にやっている学校もあって、よく分からないのは、本当にどこまで学校の自由度があるのかということです。例えば、各学校で今まで1,000時間やっていたのを800時間に減らしましょうというのは、学校では背負いきれない変更だと思いますので、そういう変更をもししようと、例えば現行制度でできる中でこういうことをやろうとするときの県民なり保護者との対話をしなければいけないのは、たぶん選挙で選ばれている大久保村長とか私なんだと思うんです。

そういう意味では、教育を変えていくときの役割と責任の在り方というのは、非常に不透明で、だからそこら辺を、今日こういう形で円卓会議で集まって、学校の校長先生や教育委員会の皆さん、あるいは教員行政に関わっていただいている皆さんもいれば、我々市町村長や知事のような選挙で選ばれて教育に直接的ではないけれども全体的に責任を負っている人間もいるので、そういう意味では、どういうことをやるかと決めたときに、どこまで誰が考え、それを持って推し進めていくのかということを経験していかないと進まないのかなと思っています。

そういう意味で、先ほど申し上げたように、この次のステップとしては、例えば、一つ提案ですが、学習指導要領はどこまで柔軟で、例えば中学校の授業時間数は今の制度上どこまで減らせるのかとか、それは教育委員会で考えてもらわないと私は分かりませんが、もしそういうふうにしたときに、学校現場はそれを受けてどういう学校のカリキュラム

をつくれれば自分たちに望ましいと思えるのかというのは、これは学校で校長先生、先生方に議論してもらい必要がありますし、そこに保護者の意見も入れて、本当にそれを県としてそういう方向で大きく教育を変えようかというときには、これは義務教育学校であれば市町村長の皆さんだったり、県立高校、あるいはもっと全体として県の教育の方針であれば県の教育委員会と私でこういう方向の改革をしたいと、ぜひこれは県民の皆さんに協力してもらいたいと。例えば不登校という概念をなくして、学校に行っていない子供も不登校と呼ぶのはやめて、学校に行っている子供と同じような教育ができるようにしていこうということを訴えて実現していくのはたぶん選挙で選ばれている私たちなので、私だけでもできないし、学校現場だけでもできないし、教育委員会だけでもできない、ここを一緒に皆さんと考えたいと私は思っています。よろしくお願いいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。三輪委員、お願いします。

○三輪委員

学校もしっかり学習指導要領を読み込んで変えていかなければと思いました。教科を超えてカリキュラムをつくっていくようなことに取り組まないといけないと思っています。

誰かが決めた新しいことに取り組んでいてもそれはまたどんどん古くなるので、共通項目のチャレンジしたいことを実現できるというところを考えたときに、先ほど岩瀬先生から、やりたいことがやれるような仕組みづくりというお話ありましたが、自立した学習者としての教職員を育てるという意味で、先生方一人一人が何かに挑戦するというのを、ぜひ今年度から進んでおります教職員の研修制度のところに長野県は入れてほしいと思います。

講座型の研修を受けるということだけでは、先生方の力はつかないと思います。やはり先生方自身も、やってみてうまくいかなかったらそこからまた次のアイデアを出す、うまくいったらそれを自信ややる気に変えていけるような、チャレンジする文化をつくっていく。毎年一つでいいから、今年は何にチャレンジしましたかということが形になって積み重なっていくといいと思いますし、長野県の教員になったらやりたいことができるようだと広げていける仕組みが欲しいと思っています。

それともう一つ、働き方改革とも連動して、先生方も社会に出て学ぶ機会をつくっていかねばいけないと思います。信州は学びで子供と学校のことには特化しがちですが、その子供に関わっている教職員も、やはり社会に出て、公民館の文化が非常にあるこの長野県の中で学べるようなことも含めて、何かアイデアが出せるようなことをまた現場でも探っていきたいと思っています。

○荒井座長

ありがとうございました。大久保委員、お願いします。

○大久保委員

いろいろ共通事項はたくさんあって、それを全部解決しようとするとは一遍には非常に難

しいハードルが多いです。例えば小規模校の学校をどうやって働きやすい場所にするか、学びやすい学校にするかというのは、意外と挑戦すれば可能性は見えてくると思います。全部統一してやるのは難しいと思うんですけども、決して根羽がやるとかそういうのは別として、できることを試行していきながら、そこへ県やこういった先生方のいろいろな御意見だとかをいただきながら、実証といいますか、いろいろやりながら動いていかないと制度は変わらないと思いますので、ぜひそんな形で動くといいなと感じました。

○荒井座長

ありがとうございました。ここで少し整理させていただきます。

まず意見交換会等を通じて様々なお立場から御意見をいただきました。そのような場で新たに学ばされ、考えさせられることも多く、また認識を改めなくてはならない部分もあったのではないかなと感じています。

他方で、私自身の専門が教育行政ですのであえてお話しさせていただきますが、独立行政機関として教育委員会の存在があり、そこが教育分野の条件整備の責務を負い、様々な意思決定を合議制という方法で行っているわけです。これに対して、先ほど知事から御発言がありましたが、学習指導要領の話等については、教育委員会、あるいは国レベルの文部科学省等の担当者をゲストとして呼びし、互いに理解を深めていくことも重要かと思っております。

二つ目は、意見交換会で出てきたアイデアを振り返りますと、「学び＝学校教育」という理解に寄り過ぎている部分もあります。長野県では、本来もっと豊かな芳醇な学びの在り方を構想し、実現していける可能性をたくさん秘めているのではないかな思っております。その意味では、本日話題となりました学校外の学びの在り方の充実、地域や社会につながる学びの実現といった点などについて、すでに長野県教育委員会でも様々なチャレンジをしてきている部分もあるかと思っております。その内容についてまだまだ私自身も含め、県民の皆さんが十分に理解していない部分もあるのではないかと思いますので、よく知り、学び、それを踏まえてこれからのあり方を考えるという取り組みも必要だと感じました。

では、もう一人のオブザーバーの教育長からも一言いただけたらと思います。

○内堀教育長

ありがとうございます。できるだけ様々な方の意見をお聞きしたいと思っております、意見交換会もオンラインで拝見させていただいたり、この会議も直接皆さんの意見をお聞きしたいということでオブザーバー参加をさせていただいております。

そのような中、この会議の今後の方向性について荒井先生からまとめていただきまして、私もそういうことかなと思っているわけですが、今日も参考にさせていただきたいような視点がたくさんありました。最後に取りまとめていくんでしょうけれども、取りまとめに至らなくても、我々県教育委員会としてしっかり受け止めて、参考にさせていただくところは参考にしていきたいと思っておりますし、荒井先生が御指摘のように、そこは既にやっているんだけどもみみたいところもあったりしますので、もしそういったことを説明する必要があるれば、そのようにさせていただきたいと思っておりますし、また県教委の取組について参考までに話を聞きたいというご意見があればお声がけいただければと思っております。

ろであります。引き続きよろしく申し上げます。

○荒井座長

ありがとうございます。

ではここで、第1回でも御披露申し上げたグラフィックレコーディングをお届けして、会を閉じていきたいと思えます。

今回も、前回に引き続き、グラフィックレコーディングを担当いただく田上さん、聞こえますでしょうか。

○田上氏

大丈夫です。田上です。よろしく申し上げます。

一旦画面共有をさせていただきます。今この画面に出ていると思いますが、前回第1回同様に、今回の会議を3分間ほどで振り返っていただけたらと思えます。

たくさん皆様のいろいろな御発言の中、第1回目から引き続き第6回目分と新しい形も見えてきたかと思えますので、一緒に振り返っていただけたらと思えます。

それでは動画を再生します。それでは、2024年2月1日第2回信州学び円卓会議、オブザーバーは阿部知事、そして内堀教育長。皆さんとこの会の振り返りです。

意見交換会を今まで全6回やってきました。9月23日の中山間地域の学びから、そこでも環境の話、自由度の話、そして学校づくりの話、さらに越境というようなことでのいるところとつながるといったところもありました。

そして10月18、10月25日と話はどんどん引き継がれてきましたが、やはりどこでも居場所の話、学びの権利の話、自由度の話、そして11月、教員の話もありました。人はみんなこぼこだと、違うのが当たり前、そのところに準拠しながら、自由度、楽しさ、どうやって実現していくか、そのような話がありました。

そして12月、1月それぞれ別々の立場で皆さんが考えてきた理想だったり、学びだったりというところがありますが、みんなの方向性は同じだと。なので仕組みを変えて新しい形をつくっていく、方向は間違っていないところが全6回で確認できたかと思えます。

その上で第1回目から引き継いできた、当たり前や教育システムのことをどのように考えていくか。同じ方向を目指しているけれども、ではどのように組織づくりをしていくのか、新しい形をつくっていくのか。今回話の中で、もう学校制度がかなり限界に達している、それは制度疲労の部分があるのではないかと。だからこそ、新しいものをつくる時に、もちろん人間関係の難しいところはありますが、特別支援も含めて大きなコミュニティとして実現しているところも今あるかと思えます。

です。第1回でもありましたが、裁量権のところを持たせていただきつつ、みんなを変えていく。ただそのときに誰か一人でできるというところではないと、みんなが納得するために、誰がどのようにして進めていくのか。そしてなかなか話が進まないこの部分をどうやってつくるのか。このいろいろな日本で止まっているここを突破するところを、長野県で目指していくと。今の自治の部分、今もできるところがありますが、ここからチャレンジを進めていくという2024年2月1日、今回も長野県の子供たちにとって最適な学びの在り方を考えてきました。そんな第2回信州学び円卓会議でした。ありがとう

ございました。

○荒井座長

ありがとうございました。

最後に、何点か確認させていただきます。次回は次年度になりますけれども、スケジュール調整させていただいた上で、もっと適切に問題の事象を捉える必要があるため、現状に対する理解を深めるために、国の文部科学省や県の教育委員会にも御協力をいただきたいと思っております。

もう一点、大久保委員から御提案いただきましたが、地域で抱える課題に対するアクションをパイロットケースとして取り組んでいくということも長野県という土地柄を考えると重要かと思っておりますので、中山間地に焦点を当てた取り組みも意識して進めてまいりたいと思っております。ありがとうございました。

○丸山課長

荒井座長、どうもありがとうございました。

それでは事務局より連絡事項でございます。今、座長からお話もございましたけれども、今後の日程についてですが、第3回信州学び円卓会議は来年度の開催を予定しております。改めて日程調整等させていただきますので、よろしく願いいたします。

また、県民の皆様からの意見募集についてでございます。現在、県民意見交換会で扱ったテーマを中心に、ホームページで意見を募集をしております。さらに今後は、長野県の学び、教育の現状について広く御意見を募集する予定です。

募集の際はホームページでお知らせいたしますが、本日傍聴されている皆様方、YouTubeで視聴されている皆様も含めまして、ぜひ多くの県民の皆様の声を届けていただければと思います。

### 3 閉 会

○丸山課長

それでは、長時間にわたりありがとうございました。

以上をもちまして本日の会議を終了いたします。お疲れさまでした。

(了)